令和６年度
第４６回少年の主張東毛地区大会

令和６年度第４６回少年の主張東毛地区大会が、８月２４日（土）日清製粉ウェルナ三の丸芸術ホールにて開催されました。

この大会は、中学生が日頃の生活を通して感じていることや考えていることを自分の言葉で発表することにより、社会の一員としての自覚を高めるとともに、少年に対する県民の理解や認識を深め、青少年の健全な成長を願って毎年開催されています。

各市町から推薦された１８名の発表者は、それぞれの主張を力強く堂々と発表してくれました。

最優秀賞に選ばれた４名の主張を掲載します。（発表順）

本 当 の 思 い や り

太田市立城東中学校　３年　内藤　仁南

「将来の夢は、パイロットです。」

「ピンクのやつがいい。」

「サッカーしようよ。」

「子供が熱を出したので、有給取らせてください。」

今の台詞を言葉だけで考えたとき、あなたに聞こえてきたのは、男性の声ですか、女性の声ですか。

鳥肌が立ちました。私は無意識に、それぞれを男性のもの、女性のものと決めつけてしまっていたのです。

これは、とある企業のＣＭで、ジェンダー平等や、社会の偏見について考えるきっかけをつくるために企画されたものだそうです。

男女平等の考えが世に広まってきて、私自身、かなり理解がある方だと思っていました。しかし、幼い頃からすり込まれてきた、これが「男」、これが「女」という概念は、私の脳に染みついてしまっていました。

このように、知らず知らずのうちに固定観念に囚われ、人を差別するような考えをもってしまっていたと気づかされた体験を、このＣＭを見て思い出しました。

友達と近所のカフェに行ったときのことです。注文をしようとすると、「私は耳が不自由なため、指差しでのご注文をお願い致します」というメッセージカー

ドを見つけました。少し驚いたけれど、指差しやジェスチャーを使って注文することができました。その店員さんは、明るく素敵な笑顔で接客をしてくれて、「障がいがあっても、障がいのない人と同じように仕事ができるんだ。すごいな、がんばってほしいな。」と、感動したことを覚えています。

ところが、このことを母に話すと、「『障がいがあっても』という考え自体が、差別に繋がることもあるんじゃない。」と返され、私はハッとしました。障がいのある人を応援しようという気持ちが、かえって差別に繋がってしまっているのかもしれない、と気づかされたのです。

しかし、誰かを応援したり、理解しようとしたりすることは、誰もが暮らしやすくなるための「配慮」でもあると思います。

例えば、トイレの男女マーク。赤と青で色が区別されていたり、男性はズボンで、女性はスカートをはいているような形だったりして、差別のように感じる人もいるかも知れません。しかし、マークの色分けがされたのは、１９６４年の東京オリンピックにて、男性の多くがスカートを身につけている国もあり、形だけでは分かりづらいだろうという考えから始まったのだそうです。形が違うのも、色覚異常を持つ方への配慮から変えたものだと知りました。

このように、少し差別に感じることも、誰かの配慮や、気遣いからなるものなのだと、私は思います。障がいがある人に、私たちが悪気なく発した「すごい」や、「頑張れ」といった言葉は、当人たちにとっては嫌かも知れません。逆に、嬉しく感じる人もいるかも知れません。相手の思いを完璧に理解することは難しいですが、考えてみることならできるはずです。「女は家で家事をしろ」や、「男は外で働け」ではなく、「それぞれに得意、不得意があるから、助け合っていこう」という伝え方なら、みんなが良い気持ちでいられるのではないでしょうか。自分がした配慮は、しっかりと相手に伝わればきっと、差別ではなくなると思います。

これまでのことをまとめて考えると、全て「思いやり」に繋がる気がします。もちろん、必要以上に気を遣って誰かを腫れ物のように扱ったり、相手を明らかに下に見たりするのはいけません。男だろうが女だろうが、障がいがあろうがなかろうが、私たちは皆、同じ人間です。しかし、考え方は人それぞれで、正解はありません。だからこそ、一人ひとりが相手のことを思い、考え、自分なりに接してみることが大切だと思います。

誰もが平等で暮らしやすい社会を、少しずつ、一緒につくっていきませんか。

本当になくなるのか

館林市立第一中学校　３年　金子　櫂子

「ヒトはいじめをやめられない」

私はこの言葉に衝撃を受けた。

けれど理由はいたって簡単であった。

「人間が集団で生きていくためのいわば『本能』だから」

「いじめはなくなるのか」と聞かれたら、大半の人が「なくなる」と答えるだろう。もちろん私もそうだ。なのに「やめられない」だなんて。そんなはずはない。

そう強く反論したくなるのは、きっと、私自身にいじめられた過去があるから。

５歳のとき、私はこの館林に引っ越してきた。そして新しく通うことになった保育園でいじめを受けることとなった。

「私たちの遊具で遊ばないで」と言った子供らしいものや、「私たちと遊びたいならスカート履いてきてね」のような意味のわからないものまで。

でも、特にひどかったのは、私が近くに行くとみんなが逃げる。それを永遠と繰り返すというものだ。

先生は、私が泣いて助けを求めても「あの子はああいう子だから」と言って笑うだけ。　そんなことが毎日続く、地獄のような日々だった。

ふとした瞬間に記憶は鮮明に蘇る。そのたびに嫌になる。消したい記憶でも、きっとこの先ずっと、ずっと私の中に残る。

というように、いじめはきっと何も生まない。なくなったほうがいいものだ、と誰もが思うだろう。

では、どうしたらなくなるのか。

学校ではアンケートを毎月実施し先生にいじめが発生したことを伝えやすい環境が整えられている。他にも道徳学習や、カウンセラーの先生の配置など。このように全国で「いじめをなくそう」と様々な取り組みがされている。

しかし、年々発生件数は増えている。

加害者にいじめをしていることを自覚させ、最悪の事態を回避するという意味では、学校での積極的な取り組みはもちろん必要だ。

だが本当にこれだけでいいのだろうか。

人が抱く負の感情は、抑え込むことはできてもなかったことにはできない。

人間は絆を深めるため、無意識に、集団の中で異なる特性を持つ存在を「敵」とみなしてしまう。そして攻撃し、排除しようとする。これがいわゆる「いじめ」につながる。私に対するいじめもきっとそうだったのだろう。

これは生き物として人間が身につけた、いわば『本能』だという。残念ながら、なくそうと言ってなくなるものではない。

結論、いじめはなくならない。
だからこそ、起こった後に何をするかも重要なことなのではないか。
私は状況を変える「周りの行動」が必要になると思う。
よく「傍観者も加害者と同罪だ」と耳にする。けれど、もしも自分に矛先が向いたらと思うと、「何もしない」という選択肢をとってしまうのも無理はない。
でもそこで勇気を出して行動したなら。きっと状況は少しでも変わるはずだ。
実際に、私へのいじめがなくなったのは、勇気を出して話しかけてくれた心優しい子のおかげである。直接いじめを止めようしたわけではない。ただ話かけてくれた。その行動に私は救われたのだ。
いじめられている子に直接、話しかけることが難しい場合は、挨拶を交わすだけでもいい。大切なのはその子を一人にしないことだ。
そして、もしもいじめられてしまっても、自分のことを嫌いにならないでほしい。
たとえ集団の絆を深める『本能』だとしても、いじめは許されない行為に変わりはない。その本能はもちろん私にもある。だが、異なる部分があっても認めることが本当の絆を深めるのだと私は思う。
起こってしまうものは仕方がない。それならどう対処していくか。それを考えることが集団で生きていくうえで重要なことなのではないか。
すべては一人一人が自分を好きでいるために。

現代で生活するために

太田市立北の杜学園　９年　鈴尾　凌功

まずはみなさん、私を見てください。私には「小耳症」という生まれつきがあります。小さい耳と書いて小耳症です。小耳症は、鼓膜までの道が狭く、難聴の症状を伴います。ですが、見た目はなんともなさそうに見えるし、このようにスピーチをすることもできます。私自身も特に気にしていません。だから友達にこの「生まれつき」のことを、改めて伝えたこともありません。
なんともなさそうに見えるとは言っても、本当のところはちがいます。声や音が、聞こえづらいのです。例えば、友達との会話中、左側から話しかけられても聞こえないし、聞き返すことが多い。先生に呼ばれても気付かない。適当な相づちをすると、上手くかみ合わず、変な間が生まれる。
「ああ。申し訳ないなあ。」
本当なら伝えるべきかもしれません。ですが人間である以上、少しは遠慮してしまいます。

「聞こえるようになりたい。」
そうやって思うことは何度もありました。手術することもできるのではないかと考え、自分で何度も調べました。ですが、非常に難易度の高い手術だそうです。
「怖い。だったらこのままでいい。」
私は怖くて手術を受ける気にはなれませんでした。
そんな時期もありましたが、この「生まれつき」と向き合い続けて１５年。私自身、あまり気にせずに生活できています。しかしある時「生まれつき」について深く考える出来事が起こりました。
それは、あるショート動画を見たときのことです。３０秒足らずの短い動画。飲食店の店員さんが、年配のお客さんに向かって、なぜか大きな声を上げている内容でした。コメント欄には、
「ひどい。クビにしろ、こんな店員。」
といった言葉が並べられていました。私も初めは同じ感想をもちました。よく利用する飲食店に、同じような人がいたら、怖いなと思ったからです。でも、違うコメントもありました。それは、
「この方は、障害者雇用で雇われている方だと思います。」
といったコメントです。その時、はっとしました。私にもこの人にも、見た目はなんともなさそうに見えるけど、「生まれつき」がある。この人には何か事情があるのかもしれない。何でも否定的に考えて、人格を否定してもいいのかと悩み、考えてしまいました。正直、目立たなくてよかったなと思っていたこの「生まれつき。」でも、人によっては理解してもらえないこともある。そう気付いた出来事でした。
今回のことのように、身勝手に発信されたショート動画で苦しむ人がいる。これが現状です。その原因は何か。もちろん、発信者のモラルの問題もあります。ですが、それを見る私たち視聴者にも、見直すべきことがあります。
多くの情報にあふれる現代。私たちは、学校でタブレットを使い授業を受け、家に帰るとスマートフォンを使用します。ＳＮＳは対面ではないけれど、立派なコミュニケーションの一つではないでしょうか。
さらに、現代の主流は「タイパ。」タイムパフォーマンスのことで、短い時間で、効率よく情報を集めることを指します。ＳＮＳは、大切なコミュニケーションの場です。それなのに、タイムパフォーマンスばかり気にして決めつけや思い込みで人格否定するコメントを載せてもいいのでしょうか。
「生まれつき。」色々なものを抱えている人が世界中にいます。そんな多様性あふれる現代で、私たちはたくさんのことを考えて生活していかなければいけません。たとえ、画面上の相手であっても、思いやりが必要です。

「匿名だからいいよね。」
そんな短い時間で出した考えではなく、相手の気持ちに寄り添うことが、現代で生活するための鍵になってくると思います。
私も、お互いが思いやりをもって、多くの人と関わって生きていきたいです。「思いやり。」みなさんも意識してみてください。

自 分 の 色 を 纏 っ て

太田市立宝泉中学校　３年　山田あゆみ

皆さんこんにちは山田あゆみです。しかしこれは日本の名前で正確にはRafaela Ayumi Yamada Silvaという名前を持っています。
私は両親ともにブラジルと日本のハーフで、この体にもブラジルの血が流れています。けれど生まれてから１５年間ブラジルに行ったことがなくずっと日本で生活してきました。
皆さんはブラジルにどんなイメージがありますか。サンバ、サッカーそんなイメージですか。物騒そうだなという意見も少なくはないでしょう。実際ブラジルは日本よりも物騒です。スリにも遭いやすいです。このような「物騒そうだな」というイメージはブラジルだけに限らずアメリカ、インドなどの他の外国にも持っている人が多いと思います。
正直良く知らないし興味がない。そんな意見の人いると思います。けれど知らないから、怖いから、そんな理由で外国人を差別したり、いじめたりするのはおかしいことです。
「日本に差別なんてない」そんな考えの人もいるのではないでしょうか。でも実際にはあるのです。
これは私が小学校低学年の時の話です。学校が終わり、家に帰る途中のことでした。その日は天気がよく気持ちの良い日だったのを今でも覚えています。あともう少しで家に到着するというところでいつも通っている小道に一つの破れた黄色いゴミ袋が落ちていました。なんだろうと思い、あたりを見回してみるとゴミがあちらこちらに散乱していました。多分カラスにゴミ袋を荒らされてしまったのだと思います。私は小学生ながらに良心が痛み、ゴミ拾いをすることを決意しました。
私がゴミを拾っていると一人の老人がこちらに向かって来るのが見えました。私は褒められるに違いないと確信しました。しかし、その老人が発した言葉は私には予想もできない言葉でした。「ゴミを散らかすな！」そうこの老人は私がゴミを道に捨てていると勘違いしてしまったのです。私は一生懸命自分が持って

いる語彙をつなぎ合わせ「きっと誤解は解ける」と期待し努力をしました。けれども私の期待とは裏腹に結局その老人は聞く耳すら持ってくれず、挙句の果てには「これだから外人は」と言う始末。私は幼いながらにその言葉に深く傷つきその場から逃げていきました。

小学校でもよく男子に「英語人だ」「国に帰れ」などいろいろなことを言われていました。今だからあれは小さな子供だったから仕方がないなと思えますが、その頃の私は深く傷付いていました。

こんな小さなこと差別じゃないという人もいるかも知れません。けれどその小さなことに傷ついた人がいます。悲しんだ人がいます。「誰かが傷ついたらそれはいじめ」こんな言葉がありますが差別にも同じことが言えるのではないのでしょうか。

このように差別は日本にもあります。人はなぜ差別をするのか。私は「知らないから」だと思います。

人種が違うということは国籍が違ったり、言語が違ったり、文化や考え方も違ったりすることが多いです。その違いが人々にとっては「未知」となるのです。やはり人間、未知なものには「怖い」という感情が湧きやすく、それ故に差別も起こってしまうのではないのでしょうか。

「ならばどうやって人種差別をなくすのか。」私はまず挨拶を交わすことから始めるべきだと思います。挨拶は魔法のようなコミュニケーション方法で、あまり仲がよくなくても挨拶をすることによってその人に好印象を与え、そこから会話につなげることもできます。けれど言語が違うとコミュニケーションが難しいですよね。だが最近では翻訳アプリが発達し、喋ると同時に他の言語に翻訳してくれるアプリケーションなどもあります。そのようなものを上手に活用することによって、言語が異なっていても コミュニケーションをとることができます 。

人は一人ひとりみんな違います。違う色を纏っています。みんながみんな互いのことを理解し、いがみ合わず協力しながら生きていくのはとても困難なことで夢のような話です。けれど私はそんな理想を現実にしたいのです。それが実現するのは今じゃないかもしれません。私達が大人になってから、もしかしたらシワシワのおばあちゃんになったときかもしれません。だから私はその未来がいち早く訪れるように行動を起こし、みんなが笑って協力できる未来に期待を抱きながらこれからの人生を歩んで行きます。